

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヤリイカ

学名 *Loligo bleekeri*

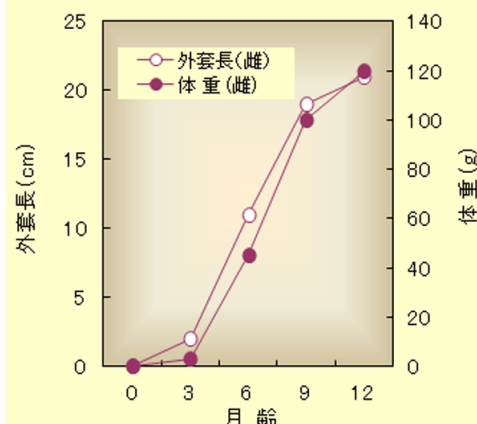
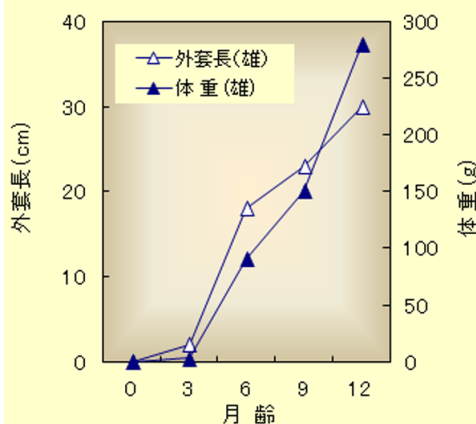
系群名 対馬暖流系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 1歳
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 本州日本海側で1～5月(2～3月中心)、北海道海域で5～7月、沿岸の岩礁域、陸棚上の沖の瀬など
索餌期・索餌場: 夏～秋季に陸棚上、主に100～200mの水深帯
食性: 魚類、イカ類、端脚類、オキアミ、浮遊性甲殻類など
捕食者: 不明

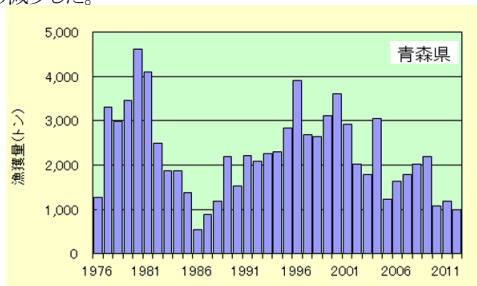
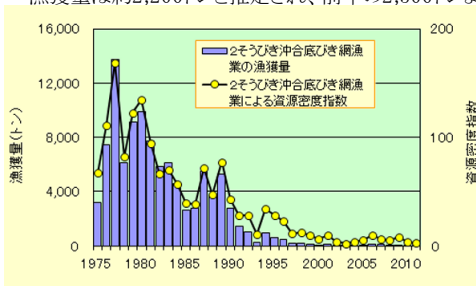


漁業の特徴

陸棚の発達する日本海西部海域(山口県～福井県)では沿岸から沖合の広範囲に分布し、各種底びき網漁業、いか釣り漁業、定置網漁業により漁獲される。盛漁期は10～3月で産卵群を中心に漁業が行われている。日本海北部(石川県～北海道)では定置網の漁獲量が底びき網よりも多い。盛漁期は産卵期の冬季である。

漁獲の動向

日本海西部海域では沖合底びき網漁業によって多獲されるが、その漁獲量は最大であった1977年には13,700トンに達したが、その後減少を続け、2011年には13トンで過去最低となった。一方、日本海北部海域で最も漁獲量の多い青森県の漁獲量は、増減を繰り返しながら2000年代には減少傾向を示している。2011年の対馬暖流系全体としての漁獲量は約2,200トンと推定され、前年の2,500トンより減少した。

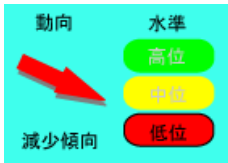


資源評価法

ヤリイカは農林統計の全国集計対象種でないため、公式統計がない地域が存在する。したがって、日本海西部海域では2そうびき沖合底びき網漁業の漁獲量と資源密度指数を、北部海域では漁獲量が多く、統計が古くから整備されている青森県の漁獲量の経年変化を、それぞれ資源量指標値として用いた。

資源状態

1975年以降の2そうびき沖合底びき網漁業による資源密度指数は、1977年には168.5を記録したものの2011年にはその約2%未満の2.9にまで減少した。この30年ほどの間には数回の一時的増加がみられたが、資源密度指数はほぼ減少の一途をたどり、現在の資源水準は低位である。一方、青森県の漁獲量の経年変化は、1985年までの減少傾向は西部海域の2そうびき沖合底びき網漁業の指数の傾向と符合するが、1986～1999年には増加傾向を示した。しかし、2000年以降は減少傾向で、2009年にはさらに大きく減少しており、資源水準は低位である。対馬暖流系全体として、資源水準は低位、動向は減少と考えられる。



管理方策

ヤリイカ資源は低水準にある。海洋環境の影響を大きく受けるため、西部海域のヤリイカ資源が急速に回復する可能性は低い。ヤリイカは単年性で、再生産が好転すれば資源は回復する可能性がある。したがって産卵親イカを確保しながら、良好な環境下での大きな年級の発生を待つことによって資源の増大を図ることを目標とした。平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABClimit = \delta_2 \cdot Ct \cdot \gamma_2$ 、 $ABCtarget = ABClimit \cdot \alpha$ で計算した。 δ_2 は資源水準によって決める係数(低位の時は0.6)、 γ_2 は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の0.5)、bとlは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)である。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	14百トン	$0.6 \cdot Cave \ 3\text{-yr} \cdot 0.97$	—	—
ABCtarget	11百トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot Cave \ 3\text{-yr} \cdot 0.97$	—	—

- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 西部海域の資源量指標値である2そうびき沖合底びき網漁業による資源密度指数は1977年以降急減し、現在も低位で減少傾向
- 北部海域の資源量指標値である青森県の漁獲量は増減を繰り返しているが、2009年以降は大きく減少した
- 対馬暖流系全体としての資源水準は低位で、動向は減少

管理方策のまとめ

- 資源変動に対する海洋環境の影響が大きいと考えられるため、西部海域のヤリイカ資源が急速に回復する可能性は低い
- 産卵親イカをある程度確保し、大きな年級の出現を待つことが重要

執筆者: 田 永軍

資源評価は毎年更新されます。